

鳥居龍藏の満蒙調査 — 調査記録の分析から —

田畑久夫[※]

1. 問題の所在

鳥居龍藏は、ここ数年来大変脚光を浴びている研究者の1人といえる。例えば、鳥居が度々訪問し、調査を試みた東アジア¹⁾に関しての写真展や、収集した貴重な民具などを中心とした展示会が、前者については東京大学総合研究資料館(東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編, 1991)、後者に関しては国立民族学博物館(国立民族博物館編1993)において、それぞれ相次いで開催されたり、自叙伝(中藪英助1995)が出版されたりしている。

かように、鳥居に対する関心が非常に高まっているのは、種々の理由が考えられるが、次の2点に大きく要約できると思われる。すなわち、第1点として、鳥居龍藏はわが国において欧米の先進諸国から導入された科学的技法を用いて、海外でのfield surveyを最初に実施した先駆者であること、第2点としては、柳田國男・南方熊楠などの研究態度と同様に、1つの学問分野(discipline)の原理や法則によって個々の事象を個別に分析・検討するのではなく、それらを全体として総合的に把握するという研究立場を貫いたことが特色としてあげられる。前者に関しては、例えば、当時としては非常に高価で、かつ操作も困難をきわめたと想像される写真機(乾板撮映)を最初に海外におけるfield surveyに携帯したこと、また後者については、第2次世界大戦後とくに顕著となった学問領域の細分化・孤立化に対する反省としての学際的研究(interdisciplinary study)の先駆者の1人として、再評価されだしたことに起因すると思われる。

本稿では、かような特色を有する鳥居龍藏の東アジアにおけるfield surveyのうち、満州²⁾(東北地区)・蒙古(モンゴル)を中心において実施されたものを取りあげる。かかる両地域はかつて満蒙と称されていたが、「私の半生はこれを研究生生活の歴史から見るとほとんど満・蒙で費やされた感」(鳥居 1928b, 鳥居龍藏全集第6巻 1976f, p. 559³⁾)をもっと述懐しているように、鳥居にとってはもっともfield surveyを集中した地域であった。それ故、鳥居のfield surveyの特色がもっともよく反映されているといえよう。とりわけ、満・蒙の両地域は、現在においても外国人研究者が自由に立ち入ってfield surveyを実施することが非常に困難な地域である。したがって、長期間の宿泊を伴ったインテンシヴなfield surveyは望むべくもない。また両地域とも、近年まで社会主義国に所属し、近年ソ連邦の崩壊、中国における近代化路線の推進などの影響を強く受け、現在ではとくにその変貌が著しい地域である。このような理由から、従来より継承されてきた伝統文化が急速に失なわれてきている。かかる意味からも、鳥居龍藏の両地域におけるfield surveyは、以前からの伝統文化が継承されてきた最後の時期に実施されたものなので、

※昭和女子大学文学部日本文学文化史学科助教授

資料的な価値が非常に高いといえよう⁴⁾。

以上論じたように、鳥居龍藏は単なる探検家あるいは冒険家としてではなく、科学的技法を用いた海外での field survey の先駆者として位置づけることができる。かような観点から、筆者は、鳥居の西南中国に居住するミャオ族調査(田畑 1991)、ロロ(イ)族調査(田畑 1994)、さらには北東シベリア・樺太(サハリン)に分布する少数民族ならびに遺跡調査(田畑 1995)に関して、拙論を重ねてきた⁵⁾。本稿も、鳥居の東アジアにおける field survey を再評価しようとする一連の作業に関連するものである。

なお、既に拙稿(田畑 1991, p. 9, 1994, p. 19など)において指摘したことであるが、鳥居龍藏の海外における field survey では、第1点として、前述したように鳥居ほど科学的な問題意識をもって長期間 field survey に従事した研究者はわが国では皆無であること、第2点として、鳥居は例えば〈Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Population Primitives de la Mongolie Orientale〉(鳥居 1914a, 鳥居龍藏全集第5巻, 1976b, pp. 121~198), 〈Etudes Anthropologiques. Les Mandchoux〉(鳥居 1914b, 鳥居龍藏全集第5巻, 1976b, pp. 199~230)などに代表される詳細な研究報告書とともに、『西比利亜から満蒙へ』(鳥居 1929, 鳥居龍藏全集第10巻 1976c, pp. 167~218), 『遼の文化を探る』(鳥居 1937, 鳥居龍藏全集第6巻 1976f, pp. 369~556)などの具体的な調査記録が残されていることである。とりわけ、これらの調査記録は詳細をきわめている。それ故、調査記録を丹念に検討することにより、鳥居の field survey の方法が把握可能となる。とくに、民俗学・民族学(文化人類学)・考古学および地理学などの野外科学(川喜田二郎1967など)と称される field survey を重視する関連諸分野においても、上述したように、各専門分野の分業化・独立化が進展し、それぞれの専門分野間では研究者の協力が得にくくなっている現状を鑑みれば、かかる点を克服する意味からも、鳥居の海外での field survey を中心とした研究業績は大いに注目されなければならないと思われる。

2. 時代的背景と調査の動機

鳥居龍藏は、精力的な field survey を日本の内外を問わず、長年にわたって実施してきた。海外での field survey は、本稿が対象としている日本を除く東アジアが主要な調査地として選定された(第1表)。第1表より判明する如く、鳥居が最初に海外において field survey に従事したのは、明治28年(1895)25歳のときであった。このときに行なった field survey が以下に論ずるように、種々の意味において、鳥居の field survey に対する立場がよくあらわれていると思われる。それ故、多少冗長な嫌いがあるが、正確さを期するためにも労を厭わず論を展開していくことにする。

海外での最初の調査地は、満州の最南端に位置する遼東半島一帯で、約5ヶ月間滞在した。当時になると遼東半島においても交通手段として馬や車が存在したが、若さの極みで、大陸旅行では草鞋穿^{ワラジハキ}の徒歩で通した。また、調査研究助手として満人旗人を雇い、満州語および文字の学習・研究を兼ねた(鳥居 1936, 鳥居龍藏全集第12巻, 1976g, p. 6)このようなスタイルで、鳥居

は field survey を実施したのであったが、その結果、アジアに石器時代の存在することを確認したことと、ドルメン⁶⁾の発見という2大成果を収めた(鳥居 1953, 鳥居龍藏全集第12巻, 1976g, p. 188) かくして、遼東半島の半島の field survey は成功裏に終了したのであったが、それは読書⁷⁾などを通じて、アジア大陸⁸⁾が人類学上極めて重要なことを熟知し、今後かかる方向での研究に従事する覚悟をきめた調査旅行であった。それ故、喜びは非常に大きいものであったと想像できる。かように、鳥居の研究・調査歴においても遼東半島の field survey は1つの転換期となったものであった。具体的には、次のような動機から遼東半島に出発したのであった。

すなわち、当時鳥居龍藏は、シベリアおよび北方大陸の人類学的研究にも興味を有していた。そこで、神田駿河台のニコライ神学校の学生についてロシア語の学習をはじめていた(鳥居 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 175)。ちょうど、地質学を専攻している神保小虎博士が北海道の地質調査を数年間実施したことが縁で、アイヌ語が堪能となった。そのようなことから、東京帝國大學文科大學の博言學教室では、特別に神保博士にアイヌ語の講義を担当してもらうことにした。鳥居は、この講義を傍聴させてもらうことにしたのである。講義の助手はパラサマレックという名前のアイヌ人であったが、講義を傍聴させてもらっている関係から、神保博士の依頼を受け、彼を自宅の2階に宿泊させることになった。そうして2人が同居しているうちに、パラサマレックは、神保博士がこのたび遼東半島の地質調査に出かけることに決定したが、その調査に同行してほしいという申し出を受けたと話をもちかけた。しかし、自分としてはそこに出かけることを好まないの、出来ることなら代わって行ってほしいと強く要望してきた。この話を聞いた鳥居は、上述したように、以前から満州をはじめとする東アジアには大変強い関心を有していたので、パラサマレックの要請を承諾した。そして、一時は神保博士の同意もとりつけた。ところが、同博士は「君は人類学、私は地質学で、互いの学問上のことを考えねばならぬ。つまり君が途中で石器時代の貝塚を発見すれば、私はそれがために地質調査がおくれる。また私が地層からおもしろい化石を発見し、その調査を始めれば、君の方は空しく日時を費やさねばならぬ」(鳥居 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 183) という理由で同行は断られることになった。しかしながら、鳥居はどうしても遼東半島に出かけたいと思い、恩師の坪井正五郎に相談したところ、東京人類學會より派遣してもらうことになったのである⁹⁾。

鳥居龍藏が遼東半島に出かけた明治28年8月には日清戦争¹⁰⁾は既に終結していたが、当時の状況は次のようであった。すなわち、同年3月までに日本軍は遼東半島の要地である旅順・大連および山東半島の威海衛などを占領した。その中でもとくに旅順占領に際しては、日本軍の残虐性が目立ち、『ニューヨーク・ワールド』・『タイム』などにも報道されたほどであった¹¹⁾。さらに戦線は拡大し、日本軍が直接天津・北京を衝くというポーズをとったため、清朝は日本に対して講和を願い出た。そのとき締結された条約は馬関(下関)条約と称され、4月17日に調印された。その主内容は遼東半島・台湾および澎湖諸島の割譲、賠償金2億両の支払い、重慶・蘇州・杭州など5港の開港などであった。これらは、いずれをとっても、日本が中国に押しつけた不平等のものであり、いわば日本の大陸政策発展の必然的な結果といえる性質のものであった。とり

わけ、遼東半島の日本への割譲は、鉄鉱石をはじめとする地下資源などの豊富な中国東北地区を、わが国の勢力範囲さらには植民地化する端緒とでもいうべき性格を秘めていた¹²⁾。このように、戦争は終結したものの、軍事面を含むあらゆる面ではなお非常に緊張していた時期に、鳥居は遼東半島に出向いたのであった。しかも、鳥居の field survey の多くは上述のような時期とはいえ、日本軍の優待便宜を得て実施されたものであった¹³⁾。かような経緯を經由して、鳥居の初期における海外での field survey の関心の満州から、次第に蒙古・シベリアなど北東アジア、あるいは西南中国など東アジア全域に拡大していったのである。

上述したような過程で、鳥居龍藏は海外における field survey を積み重ねてきたのであった。この点は、一方では、当時におけるわが国のアジアに関する研究の動向と完全に一致するものであったといえよう。以下では、かかる点を検討しておこう。

近世末期から近代にかけて、すなわち幕末から明治・大正時代にかけて、日本が東アジアの中でも最初にとくに関心をもったのは、樺太(サハリン)・千島列島に代表される北方であった¹⁴⁾。かかる北方探検・調査の直接の動機は、明治8年(1871)7月、奄美大島に漂着したハンペンゴロウという外国人によって、ロシアが南下政策をとり北方に進出しようとしていることが判明したためであるとされる¹⁵⁾(長沢 1969, p. 208)。これに対して、万事事勿れ主義の立場をとっていた幕府は、当初かかる事実を秘密にしていた。しかし、林子平・三浦梅園・平沢旭山などをはじめとする当時の知識人の間にも、その噂が拡大していった¹⁶⁾。とりわけ、林子平の恩師にあたる仙台藩の医師工藤平助は、天明3年(1783)に『赤蝦夷風説考』を著わし、老中田沼意次に献上した。そのことにより、この書物は幕府内部において大きな動揺を与えることになった¹⁷⁾。そこで、第2表にみられるように、幕府は天明5年(1785)、山口鉄五郎、佐藤玄六郎ら5名の普請役に最上徳内・里見平蔵らを随行させて、サハリンを中心とする北方探検を向わせた。その後も幕府は、19世紀初頭の間宮林蔵によるサハリン・沿海州探検まで、度々サハリン・千島列島を中心とする北方の探検・調査を企てた。かかる理由は、上述したように、ロシアによる南下政策を監視するためであった¹⁸⁾。それ故、探検の派遣主体は国家侵略の危険を感じた幕府であった。

明治時代に入ると、欧米からの近代技術が導入されるとともに、欧米流の新しい学問が盛んに輸入された。探検・調査に関しても、明治12年(1879)に東京地学協会¹⁹⁾が設置され、その機関誌『東京地学協会報告²⁰⁾』が発行されるに及んで、以前にも増して北方に限らず周辺地域への探検・調査の気運が高まってきた。すなわち、東京地学協会は、ロンドンの'Royal Geographical Society'²¹⁾(王立地理学会)を範として設定されたもので、日本最大の地理学・地学関係の学会であった²²⁾。同協会の主要活動は、地理学・地学の普及をはじめ、主としてわが国との関係が深い、中国・モンゴルなどを中心とする東アジア全域の事情収集・探検援助などであった。このように、とくに東アジアに活動の中心が置かれたのは、かかる地域の知識を正確に把握することこそが、わが国の発展に寄与するものであると考えられたからであった。

以降かような方向性はその後も継承されたのであったが、さらに飛躍的に東アジアに関心をもたれるようになったのは、明治18年(1886)に大学令が公布されたことに関連すると考えられる。

すなわち、その公布によって、東京帝國大學文科大学が新たに創設され、その中に史学科が開設されることになった。ここにおいて、東アジアを主体とする世界各地の事情収集や探検・調査などは、一部には皇室の援助による政治家・外交官などの民間知識人指導型の東京地学協会から、近代的な調査・研究を理論面・実践面においても指導する大学の研究者にというように、大転換期を迎えることになった。例えば、史学科教授那河通世によって『支那通史』（明治21年、1888）が出版された。この書物に代表される研究は、当時における探検・調査の理論的な支柱となり、近代的なアジア研究の端緒が開かれることになった。とくに本文でも言及してきたように、日清戦争に代表される如く、大陸への侵略がわが国の国策となるに至り、そのことと非常に深く関連して、飛躍的にわが国のアジア研究も増加した。さらに、明治40年（1907）に京都大学、同41年に早稲田大学、同44年に慶応大学など日本の主要な官・私立大学にそれぞれ史学科が相次いで開設されると、以前よりも増して急速にアジア研究が増加し、研究地域も拡大していった。以上が、日本人による東アジアを中心とする海外調査および研究に関する時代的な概略である。

かかる時代的背景を踏まえて、再度第2表を参照してみよう。そうすると、わが国の東アジアに関する探検および調査については、一定の傾向が明らかに存在する。すなわち、幕末に実施された北方を主とする探検・調査はすべて、幕府や松前藩などが国家を維持しようとする防衛上の見地から行なったと推定できる。それ故、多くが幕府などの命令によって探検・調査したといえる。また、河口慧海あるいは大谷探検隊（第1次）に代表されるように、明治時代に入って実施された探検・調査は、主として宗教上の理由からやむなくアジアの未開地を踏査して、聖地などに出かける必要から行われたといえよう。その後、明治時代末期になると、例えば関野貞に代表されるように、調査対象が建築物というように限定されることが多くなった。次いで、京都大学史学科出身の研究者を中心とする調査などにみられる如く、従来のように個人が独力で踏査するのではなく、各々がグループを形成し、調査を実施するなど、field surveyの方法にも多様化がみられる。鳥居龍藏に関しては、次章においてfield surveyの方法を検討していくことにする。

3. 調査の概要

1) 満州

鳥居龍藏は、満州において合計9回にも及ぶfield surveyを実施している。期間も、明治28年（1895）に行なった遼東半島を中心とする満州南部の調査から、昭和10年（1935）に実施された華北調査の一環とした調査まで、実に45年間にもわたる長期間に達する。このように、鳥居は海外におけるfield surveyの中でも、満州は蒙古²³⁾とともに、とくに関心もたれた地域であった。

上述のように、鳥居は満州に関しては合計9回にも及ぶfield surveyを行っている。しかし、内容については明治34年（1901）に実施された第3回までのfield surveyと、それ以降のfield surveyにおいては、調査対象となっているfieldも若干異なっている。すなわち、前者においては、fieldが主として現在の遼寧省を中心とする南満州地域に限定されていたのに対し、後者は、昭和2年（1927）8月から10月にかけて実施された第4回調査に代表されるように、調査の中心

は満州であるが、それに隣接するチチハルや通遼などの周辺地域に居住する蒙古族の調査も兼ねている点である（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1976f, pp. 285～394）。それ故、後者すなわち第4回以降の field survey は、後述する蒙古調査と一部地域が重複することになる²⁴⁾。かような理由から、第1回から第3回までの field survey を事例としてとりあげ、主として各々のコース、調査内容などを検討していくことにする（第1図）。幸い、第3回調査までの field survey に関しては、復命書という形式で報告書が刊行されている（鳥居龍藏 1910b, 鳥居龍藏全集第10巻 1976c, pp. 1～166）。したがって、この報告書を中心に論を展開していくことにする。

鳥居は、満州における調査研究の目的を、「満州に関する事項にして調査研究を要するものは頗る多岐なりと雖も、就中其の人種、歴史、古物等に関してはまだ充分の調査を経ざるが故に、必要の程度殊に深甚なるものあり」（鳥居龍藏 1910b, 鳥居龍藏全集第10巻 1976c, p. 10）と述べ、自分が関心を有している人種・歴史・古物などについては、かかる地域に関する調査・研究のおくれていることを指摘し、かような点を克服するためとしている。このような問題意識を受けて、第1回目の調査は、既述したように、日清講和条約調印後の明治28年（1895）8月から12月にかけて、満州の玄関口とでも称すべき遼東半島を主体としたものであった。派遣主体は東京人類學會であった。調査コースとしては、次のようであった。

最初船で、柳樹屯（現在の大连）に到着した。そのときの様子を「甲板から陸上を見渡すと、その土地の広漠なるに対して大いに驚かされ、これからどうしてかかる土地に徒歩探査や発見が出来るであろうかと心配したものである」（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 289）と記しているように、当初は大陸調査が初めてということもあり非常に不安であった。かような不安な気持ちで上陸した柳樹屯は、その名称通り集落の周辺に柳が茂っている漁村で、付近に兵隊の駐屯するような土城が存在するだけの寒村であった。直ちに、日本軍の総督府所在地がある金州に向かった。金州は、当時遼東半島の中心地であった。そこで数日間滞在して、旅行準備や軍事司令部との交渉も行なった²⁵⁾。これら一連の準備や交渉が終了すると、陸路を調査しながら3～4日間を費やして水師營（旅順）に到着した。当時の水師營は、山東半島から渤海湾を横断して航行してくる中国船の港湾として繁栄していた。また、水師營は中国海軍の根拠地でもあった。鳥居は、この地でも同様に調査に従事した。水師營での調査が完了すると、海軍の御用船に便乗して山東省の劉公島に渡った。その目的は、そこに居住する住民（漢民族）の風俗・習慣などを調査するためであった。その後、再度水師營に戻り、往路と同様陸路を金州に帰った。

金州では、周辺の住民の民俗調査を実施すると同時に、北方に向けての調査の準備を行なった。当時は鉄道が完成していなかったため、交通手段としては馬車に乗るか、徒歩によるかであった。鳥居は、途中で調査の便や費用などを考慮して後者で行くことにした。最初に到着したのは普蘭店であった。そこまでの道中で、石器類の他、搏で築いた明代と想定される礮台をみつけた。しかも、その搏の中に、幾何学的紋様が施された古搏が存在することも確認出来た。このような素晴らしい考古学的な発見は各所でみられた。その後、復州・熊岳城・蓋平・大石橋などを經由

して海城に到着した。海城でも多くの調査を試みたが、とりわけ、同城壁の下部において、ササン朝獅子狩式の台石を発見したのが最大の収穫であった。海城での調査が一応終了すると、周辺の岫巖・析木城の調査に従事した。とくに後者では、鉄塔・金塔などの各種の塔を見学したり、また近郊の姑嫂石でドルメンを発見したのは大きな喜びであった。

その後、大洋河を遡上し、龍王朝に出て鳳凰城に達した。ここでも若干の調査に従事し、高麗内を經由して鴨緑江の西岸に位置する九連城に到着した。ここから鴨緑江を独木船で渡河し、東岸に位置する朝鮮の義州に着いた。義州から再度鴨緑江を渡って、九連城に戻った。義州に向かったのは、鴨緑江を渡河する目的のみであった。九連城からは元来た道路を帰るのではなく、鴨緑江の西岸沿いに下り、沙河鎮を經由して、鳳凰城まで引き返した。ここから、黄海沿いに位置する大弧山に出た。大弧山から黄海の海岸線を貔子窩まで進むことにした。その途中では紅水城を調査したり、石器時代の遺跡調査も行なった。貔子窩から普蘭店街道を進んだが、その間で高句麗時代の古城跡などを発見し、無事金州に到着した。

これら5ヶ月にも及ぶfield surveyでは、漢民族・満州族の土俗学上の調査、満州旗人の言語・文字・有史以前の遺跡などの調査を主として実施した。その他、旅行中満州人に満州文字を習ったが、これがその後の満州調査に役立つことになった。なお、金州滞在中、付近の洞窟で、古佛像の彫刻を発見し、これについて調査したかったが、帰国船の出航と重なりできなかった。この点のみが心残りであった。

第2回目の調査は、日露戦争が終結した直後の明治38年(1905)9月から11月にかけて実施された。派遣主体は、東京帝國大學であった。その目的は、「満州に於ける諸般の事項の調査研究を必要なりとし、各専門家を同地に派遣することなれり」(鳥居龍藏 1910b, 鳥居龍藏全集第10巻 1976c, p. 11)というものであった。すなわち、東京帝國大學では、伊東忠太博士に建築関連の調査を、市村瓊次郎博士に歴史関係の調査を任命するとともに、鳥居には人類学上の調査を担当することを命じたのであった²⁶⁾。このような事情のため、鳥居は前記の伊東・市村の両博士と共に、当時日本海軍の軍港であった広島県の宇品港より御用船に乗船して大連に向かった。到着した大連は、第1回目の調査のときにみた寒村の柳樹屯ではなかった。すなわち、その名称もロシア語のПальний Востокつまり極東という意味をもつ大連と改称しており、ロシア風の市街地を有し、大きく発展していることに非常に驚いた。さらに、ロシアによって南満州鉄道が既に完成していたので、調査旅行はこの鉄道を利用することが可能となった²⁷⁾。鉄道で大連から旅順にまで行ってみると、旅順の方が大連よりもより大きく変貌しているのに驚嘆した。すなわち、当地は第1回目の調査時の水師營とは異なり、ロシア人の市街地が大きく存在していると共に、ロシア軍の軍事設備が整っていることにびっくりしたものであった。再度、列車に乗車して遼東半島の中心地金州に到着した。しかし、金州だけは前2都市とは異なり、昔ながらの面影をそのまま残しており、まったく変化していなかったため、非常になつかしく感じられた²⁸⁾。

また鉄道によって普蘭店に到着した。ここでは数日間滞在して、近郊の鍋底山の山麓に出かけ、石器時代の遺跡・遺物の調査に従事した。その目的は前回の調査の折りに、各種類の石器類の採

集はしたものの、それに伴う土器がどのような種類のものであるかがまったく知られていなかったからである。ところが、鍋底山山麓に来てはじめて石器時代の土器の種類が判明したのである。鳥居は、この点について、「満州石器時代研究史上最も大書特筆すべきものであると思う」（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 291）と述べ、その輝かしい成果に大いに満足したのであった。

その後、鉄路で遼陽に着き調査に従事し、素晴らしい成果をあげたが、この点に関しては後述したい。遼陽からも同様に列車に乘車して奉天に到着した。奉天では、総軍司令部の世話で、宮殿内の宝物の調査²⁹⁾を同行の伊東・市村の両博士および内藤博士とともに行なったり、東陵・北陵さらにはラマ廟などの見学にも出かけた。数日間で奉天での調査を一応切り上げ、さらに鉄路を鉄嶺まで北上した。そこから鉄道と分かれて北西に針路をとり、遼河を渡河し、法庫門經由康平に到着した。ここは、蒙古族科爾沁^{カルチン}の支配地であり、満州族の管轄ではない。鳥居は、科爾沁管下の王宮などの調査を詳しく行い、再度康平に戻った。そこから、冒険に出、鉄道で南下して奉天まで帰ってきた。

次いで、鴨緑江方面を調査するために、東に針路をとり、渾河を渡河して無順・營盤經由興京に着いた。その間では、古城や満州族旧家の人々の身体測定や風俗・習慣などの民俗調査も実施した。興京は昔のホトアラで、以前の満州朝廷の陵墓が存在する古都である。鳥居はここで満州歴代の陵墓を詳細に調査することができた。その結果、当地の陵墓は奉天のものとはまったく異なり、満州民族固有の形式をよく残していることが判明した。すなわち、各々の陵墓は土墳で、その上に朝鮮紙で作られた幣束が1本ずつ立てられているというものであった。これらの調査が終了すると、長柵を越えて通化に出た。このコースは、馬賊の巢窟として有名な場所を通過することになるが、何とか無事通過することができた。そこから、山越えて鴨緑江上流の通溝に達した。ここで、高句麗好太王の碑文や、千をはるかに超える古墳郡、古城などを3日間滞在して精力的に調査を試みた³⁰⁾。これら一連の調査が成功裏に終了すると、帰路は鴨緑江に沿って懷仁に出、その後再び長柵を越えて同じ道程を奉天に帰った。次いで、鉄路で一路大連に向かった。

なお、遼陽の調査に関してであるが、当地では博塔の他、漢代博墓³¹⁾の存在を発見し、その数基を発掘して、鏡・土器・装飾品を得たことである。そして、これらの遺品などから、これら一連の遺跡群は遼東郡治に所属するもので、鳥居の発見としてはもっとも誇るに足るものであったと回顧している（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 291）。

今回の調査の収穫を箇条書きに列举すると、

- a) 渾河流域に居住する未だに同化していない満州族の身体測定
- b) 満州族の風俗・有史以前の研究
- c) 漢末・三国時代などにおける漢民族の遺跡調査
- d) 蒙古族の調査

の4項目が成功裏に終了したことであった（鳥居龍藏 1910b, 鳥居龍藏全集第10巻 1976c, p. 11）。

以上検討してきた第2回調査の概要は、明治38年（1905）12月9日付けの『官報』に記載され

た復命書に端的に要約されている（鳥居龍藏 1905, 鳥居龍藏全集第8巻 1976a, pp. 534~542）。

明治42年（1909）3月から5月にかけて実施された第3回調査³²⁾の動機は、前2回の満州調査とは若干異なっていた。すなわち、鳥居の方から現地での field survey を申し出た第1回調査（ただし派遣主体は東京人類學會）や、勤務している大学の方から派遣された第2回調査とは異なり、個人的に鳥居に対して調査に来てほしいという依頼を受けた調査であった。その依頼というのは、最近旅順老鉄山の山麓一帯を中心に貝塚や古墳などが発見され、そこから各種の遺物が掘り出されるので、一度調査してほしいというものであった（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 294）。そこで、当時所属していた人類学教室主任坪井正五郎と相談して、同地に調査に出かけることにした³³⁾。しかし、調査を実施するには費用が不足するので、南満州鉄道株式会社および大阪商船株式会社より援助してもらうことにした。ただし、派遣主体は、鳥居が東京帝國大學に所属している関係からか、東京帝國大學からの出張という形式となった³⁴⁾。

3月22日に神戸港を出航し、25日に大連に到着した。同行は南満州鉄道株式会社の社員井上畑作であった。両名は共に旅順まで行き、そこで都督府の命令を受けた技師および通訳とともに、依頼を受けた老鉄山一帯の調査を開始した。その結果、当地の古墳は明らかに漢代の墓であることが、埋蔵していた古銭・装飾品などから証明された。また、これらの墳墓は、第2回調査で発見した漢代の埴墓と同一の形式であることも合わせて確認できた。これらの調査には20日余りの日数を費やした³⁵⁾。

その後、上記の井上とともに、普蘭店を経由して貔子窩に行き、調査を実施した。その調査終了後、普蘭店に再び戻った。ここでも調査に従事し、熊岳城・大石橋を経て営口に到着した。その間においても、例えば熊岳城では漢代の遺跡を発掘するなど、精力的な主として考古学的調査を続行した。営口では遼河の河口を見学し、再び大石橋を経由して遼陽に向かった。遼陽では、第2回目の調査の継続という意味を含めて、大々的に漢代の墳墓の発掘に従事した。その結果、石棺・埴棺・石椁などの発見発掘をみた。これら一連の発掘の結果、南の熊岳城と遺跡との比較が充分行なえることになった。そのことにより、満州における漢代の考古学はやや基礎的研究が可能となった（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 294）。ここでの発掘に要した期間は1週間であった。さらに撫順に向かい、金時代の陶器の窯跡などの発掘に従事していたところ、父親の死去の急報に接した。そこで、直ちに発掘を中止して帰京することにした。

当初の計画では、その後再度旅順を訪れ、残しておいた巨大な埴墓を発掘した後、北上し奉天に向かい同地を調査する予定であった。その後、ハルビンにまで更に北上し、松花江上流域地方をも調査することになっていた。これらの調査が終了すると奉天に帰り、支線の安奉線に乗ってその沿線を調査しつつ、旅順に戻り、沖合いに浮かぶ廟島列島をも調査するつもりであった。ところが、かように長期間にわたる調査計画も、未完のままに終了してしまったのであった。しかしながら、当初の目的である旅順老鉄山山麓一帯の考古学的調査は成功裏に完了した。その結果、付近一帯の古墳群が漢代の墳墓であることが判明した。さらに、各地の調査から、満州における石器時代の遺跡・遺物のことが一層明らかになったことは、特筆すべきことであるといえる。

なお、これら満州族に関する人類学的研究は、以上論じた3回にわたる field survey を主体として、仏文の論改として発表している（鳥居龍藏 1914b, 鳥居龍藏全集第5巻 1976b, pp. 199~230）。さらに、満州族の先史時代を中心とした考古・民族研究も同様に仏文の論文として完成している（鳥居龍藏 1915, 鳥居龍藏全集第5巻 1976b, pp. 231~310）。

2) 蒙古

蒙古調査は、合計4回実施された。既述のように、鳥居龍藏の海外での field survey の特色は、詳細な調査を実施することは勿論のこと、その結果を学術論文あるいは報告書としてまとめる以前に、field survey に関する具体的な調査日誌または調査記録として出版している点である。後者に類するものとしては、第1・2回蒙古調査³⁶⁾に関するもの（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, pp. 1~284）、昭和2年（1927）秋季に実施された調査³⁷⁾に関するもの（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, pp. 285~394）、および第3回蒙古調査³⁸⁾に関するもの（鳥居龍藏 1932, 鳥居龍藏全集第9巻 1976b, pp. 395~542）などが存在する。本稿では、これら一連の蒙古調査のうち、かかる調査期間のもっとも長期におよぶ第1回・第2回蒙古調査を中心に検討していくことにしたい。この第1回・第2回蒙古調査に関しては、上述したように、非常に具体的でかつ詳細な旅行記録が存在している。それ故、その記録を以下の記述にあたって参照することにした³⁹⁾。なお、これらの蒙古調査に関しては、後に仏文で書かれた学術論文（鳥居龍藏 1914a, 鳥居龍藏全集第5巻 1976b, pp. 121~198）が発表されている。

今回の調査の目的を、鳥居は、「東蒙古、殊に興安嶺方面及び潢河流域は、人類学上未だ閩黒界裡に属す。されば若し是等地方に於いて、斯学上の探検調査をなしたらんには、其の得べき結果は頗る大なりと云う可し。」（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 3）と自序の冒頭で論じ、かかる地方での探検調査の空白部を克服することを第1とした。かように、この地方に興味・関心を強くもったのは、上述の自序でも明らかな如く、探検調査の空白を埋めることであった。が直接的には、前項で論じた日露講和条約調印直後に実施した第2回満州調査から帰国してからであった。

すなわち、「余は日露戦争の際、東京帝国大学より人類学調査の為、満州に命じられ、満州より蒙古科爾沁の二三旗賓圖王、薄王管下等に至る多少得る所ありしが、此の時より、人類学上東蒙古の頗る興味あるを感じ、此の調査旅行より帰り来ると共に、好んで蒙古に関する旅行記其の他の著書を読み、其れに拠って益々蒙古研究の興味を覚え、機会だにあらば、余自ら再び蒙古の地を踏み、研究・調査せんと念切なりし際、端なくも絶好の機会（下線部一筆者）に際会せり。」（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1976b, p. 12）というものであった。ここで述べている絶好の機会とは、蒙古の南端部に位置する喀喇沁右旗で、日本人の女性教師を1年間の契約ではあるが探し求めているという情報を入手したからであった。この情報を提供してくれたのは、かつて満州において調査（第2回満州調査）を共に行なったことのある市村瓊次郎博士であった。市村博士は、鳥居の自宅を訪問して、先日、北京に滞在している服部宇之吉博士と安井小太郎の両氏から手紙が来て、蒙古喀喇沁女学堂（女学校）の日本人女性教師1名⁴⁰⁾が2ヶ年

の満期で帰国することになったため、その後任者として誰か適当な女性を推薦してほしいという依頼を受けた。そこで、東胡民族や契丹に関して特別の興味を有し、研究している君のことを思い出し、夫人と同伴で出かけてみないか、と蒙古行きを薦めた。鳥居は、妻と相談の上御返事したいと一応その場は返答を保留した。しかし、妻と相談の結果、喀喇沁府に出かけることを承諾した⁴¹⁾ (鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, pp. 236)。蒙古には、当初の計画では夫婦同伴で出発する予定であった。しかし、鳥居は、明治35年(1902)7月から翌年6月にかけて field survey を実施した西南中国に居住する少数民族ミャオ族に関する報告書(鳥居龍藏 1907, 鳥居龍藏全集第11巻 1976a, pp. 1~280)を作成中であった。そのため、妻のみが3月に出発し、鳥居はそれが終了した4月に約1ヶ月おくらせて出かけることになった⁴²⁾。

以上のような経緯を経て、夫婦同伴で蒙古に出かけることになった⁴³⁾。鳥居が出発に先立って、蒙古において主として調査を実施しようと考えていたのは、次の5項目であった。

すなわち、

ア) 蒙古地方に居住する蒙古人の身体測定などを中心とする形質人類学的調査

イ) 言語に関する調査

ウ) 風俗・習慣などをはじめとする主として民俗学に関する調査

エ) 俚歌、童謡、童話など歌謡に関する調査

オ) 古物・遺跡などの考古学的調査(鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 3)

というもので、非常に多岐にわたるものであった。

さらに、今回の全体の調査計画では、最初の1年間は喀喇沁王府において、主として蒙古語を学習すると同時に、王府およびその周辺地域において、上記ア), ウ), エ) の各項目を中心とする調査に従事した(第1回蒙古調査)。蒙古語に関しては、鳥居の方は以前満州を調査したとき(第1回満州調査)、若干学習済みであった。しかし、十分に会話ができるまでには上達していなかった点や、妻の方はまったく初歩からであったので、とくに言葉の修得には力を入れた⁴⁴⁾。翌年すなわち明治40年(1907)1月、喀喇沁王は毎年の慣例にならい、満州皇帝に謁見すべく上京の礼をとることになった。夫婦もこの一行に先立って北京に行くことにした。その理由は、妻が妊娠していたので、日本で出産させるためであった。3月に長女⁴⁵⁾がめでたく出産すると、6月にはその嬰兒を伴って再度蒙古に向かった(第2回蒙古調査)。なお、このときは、喀喇沁王府との契約は既に終了していたが、蒙古地方の field survey を行なうために出発したのであった。以下では、次のような理由から、第2回蒙古調査のコースおよび概要を詳細に検討していくことにする(第2図)。すなわち、上述したように、第1回目の蒙古行きは、調査というより蒙古人の子弟の教育顧問⁴⁶⁾としての任務が中心であったといえる。それ故、調査地は、王政府およびその周辺地域に限定されることになった。これに対して、第2回目の蒙古調査においては、既述の如く、教育顧問としての契約も終わっていたので、自由に調査に没頭できるという状態であった。

第2回目の蒙古調査のため、6月に日本を出発した。行程は、直接喀喇沁王府に向かうのでは

なく、まず北京を目ざした。北京には、鳥居夫妻の蒙古行きのきっかけとなった服部宇之助博士夫妻⁴⁷⁾が滞在していたからであった。北京滞在中、今回も世話になった種々の機関や日本人にお礼の挨拶に出かけたが、その折、某軍人に調査旅行に妻子を同行させるのは不可能であると非難されたことがあった⁴⁸⁾。しかし、鳥居は、いかに不可能といわれても、かならず成し遂げるという非常に強い意志が今回の蒙古行きにはあった。かかる点は、今回の調査は前回と異なり、まったく自分の意志で現地に出発したからに他ならないと推察できる。

その後、喀喇沁王府に出かけ、12月までそこに滞在した⁴⁹⁾。ここでは、前回に引き続いて蒙古語の修得にとくに力を入れた。というのは、王府では、ここ100年来、清朝の影響を多大に受け、土俗学的には変貌が激しく、蒙古研究としては価値があるとはいえないという状態であった。しかしながら、言語に関しては、多少事情が異なり、盛んに蒙古語が用いられていたため修得が可能であった⁵⁰⁾。また、王府は西伯河の上流に位置していたが、この川の河畔には石包丁をはじめとする有史以前の石器時代の遺物が多数出土したので、それらの調査も合わせて実施した。

12月下旬には、王府より赤峰に向かった。同行は、当時まだ蒙古語の会話に関して十分な自信がもてなかったため、蒙古語の教師として、ポンスクという蒙古人の老人を雇った。赤峰が所属する赤峰県は、当時清国政府領としては最北に位置する県で、その県城赤峰はこの地方一帯の穀物の集積地として大変有名だった。また、赤峰は西伯河と英金河との合流地点でもあり、戸数は2~3,000戸、住民はすべて漢民族であった⁵¹⁾。ここにかつて来た目的は、英金河畔に出土する石器時代の遺跡や、遼代の土城などを探査するためであった。赤峰までのコースは、180清里で、途中公爺府を経由する比較的緩やかな山道であった。

赤峰周辺の種々の調査が一応終了した翌年の1月21日に、鳥居は妻子を当地に残して、ポンスク老人および赤峰県の騎兵1名とともに、遼の中京遺跡を訪問する短い調査旅行に出発した。コースは、まず昨年滞在していた喀喇沁王府まで西伯河に沿って南下することからはじまった。喀喇沁では、同行者のポンスク老人の家に1泊したが、王および王妃は例年どおり上京していたので、王府には立ち寄りなかった。翌日、さらに西伯河に沿って遡上し、王爺府經由石虎に行くことにした。石虎までは数日間の行程であるが、そこに存在する石人・石虎・石羊などの石造遺物を見学するためであった。鳥居の推定では、これらの石造遺物は、遼時代のものであった。その理由は、石造遺物が存在する石虎は、遼の中京を流れる老吟河の支流暖河沿いに位置しているため、川沿いに進めば容易に中京に達することができる。すなわち、石虎は遼の文化圏に所属するものと考えられるからである。

このように、遼文化を推定するのに重要な遺跡と看做される石虎での調査が無事終了すると、今度は暖河を下って目的地の遼の中京を目ざした。中京は喀喇沁中旗下にあり、その一帯は老吟河畔の広大な平野となっている。城域は正方形で、方位は正しく東西南北を示していた。また城壁は、土を磚のように積み重ねた土城で、高さ1丈8尺、厚さ5尺余り、周囲は40清里であった。城内の東西には相対する13重の塔、また南部にも古塔がみられた。しかしながら、この城は、明朝より以降、まったく用いられていないため、城内は現在ではコウリャン畑と化していた。鳥居

は、ここで数日間を費やして、測量を含む詳細な調査を行なった。赤峰に戻ったのは1月31日であった。赤峰では蒙古語の学習や周辺の調査などして、春がくる3月まで過した。

3月になり、気温も次第に緩みはじめた。しかし、気温が上昇したとはいえ、日本でいえばまだ極寒のような状態であった。だが、北上するためには、この季節から出発する必要があった。出発に際して1つの大問題が生じた。というのは、北方に向けての調査旅行に同行することを約束していたポンスク老人が、直前になって同行を謝絶したことである⁵²⁾。そこで、やむなく親子3名で赤峰を出発することにした。このような決断が行なえたのは、経済上浪費することが許されないという理由以外に、当時夫妻は蒙古語の日常会話程度については話すことができるようになっていたからであった。また、赤峰では、調査旅行に関する種々の準備—例えば通過する各王府や世話になった人々に贈る物品⁵³⁾など—を行なった。なお、夫婦の旅行の出立ちといえは、「余等夫婦共に毛皮の裏にしたる長きマント及びシナ服を作り、即ち南方の蒙古人の用いるものと同じきもの、子供にも亦余り寒気を感じぬ様の衣服を準備し」(鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 30) という大仕掛けなものであった。調査旅行は馬車2輦で出発し、1輦には夫妻とその子が、他の車輦には上述の贈り物などを載せた⁵⁴⁾。旅立ちは3月15日だった。

コースは、赤峰から英金河を渡河して、北に進むというものである。旅程中、最初に本格的な調査を試みたのは、元代の国公張氏の墳墓(国公攻と呼ばれる)であった。墳墓では石碑の調査を主として行ない、碑文の筆者も実施した。その後、烏丹城を経由して、東翁牛特王府に到着した。王府では、種々と問題が生じたが、鳥居親子のみ王府内で宿泊することができた⁵⁵⁾。ここでは、国公攻の碑文を再調査したり、現地ではボロホト(青城)と呼ばれている遼代の古城跡(烏丹古城)の見学などして、約1週間滞在した⁵⁶⁾。

その後、牛車に乗って丘陵上の蒙古人の住居などを観察しながら、草原を北上した。戸数7戸のチャガンマンハ村を通過すると、東ゴビの砂漠に突入した。現地では、かかる砂漠をManhaと称している。Manhaとは砂漠の砂を意味する。親子は、チャガンマンハ村ではじめて蒙古人のテントに宿泊することになった。鳥居は、そのテントの平面図などを作成した。次いで、当初の予定では、巴林右旗(西巴林)に出るために、潢河を渡河してニューマモリに行く計画であった。しかし、潢河は既に解氷期で、川は氷塊を伴う激流と化していた。そのため、とても渡河できる状況ではなかった。そこで、水量が減じるまで数日間様子をみることにした。鳥居は、この間を利用して、潢河の河畔で土器の破片や石鏃・石斧などが出土する遺跡の調査を行なった。渡河が可能になったのは4月4日であった。渡河に関しては、東翁特牛王府の役人および宿泊していたコロスット村の村長などが慎重に協議して決定した。

かろうじて潢河を渡河することに成功した後、チョロンリム(石廟)・ホイリム(土塀)などを調査しながら、4月10日には大巴林王府に到着した。王府では2泊し、潢河支流チャガムレン(白河)に沿って慶州古城に向かう。4月15日、前方に1つの高塔が聳えているのが目にとまった。この塔は、漢民族が白塔子(現地ではチャガンサバラ)と呼んでいるものである。塔は土城の中に建てられており、ここがチンチンホトンつまり古城跡なのである。当地で数日間を費

やして写真撮影を含む調査に従事した。その結果、「此の古城及び其の他の遺物は、唐代宋初に渉れる文化の程度を知るには最も興味ある材料なり。殊に契丹の黄金時代たる。聖宗当時の状態を知らんと欲せば、此のチンヂンホトン（慶州城—筆者註）の古城は苟も閑却すべからざるものなり」（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 77）という貴重なものであるということが判明した。

慶州古城の調査が終了すると、さらに北上して小巴林王府を目ざした。途中のホトン・ヌ・アイラ村では古城などを見学しながら、4月19日に王府に着いた。王妃は、前々年喀喇沁から入興したので、妻が教えたことがあった。そのためか、当地では大歓迎を受けた。2日間滞在してウルヂム村を目ざした。この村周辺には、遼の上京が置かれていたからである。上京は、蒙古語では既述したことのあるボロホトンといい、青城の意味である⁵⁷⁾。中国の古文献に登場する「波羅城」がこれに相当するといわれてきた。かように、古文献にも散見する非常に有名な古城であるが、「されど未だ一人の専門学者の此の地に來りて、精密に実践調査せし人なきを以て、余等は其の位置を確定するに尤も困難苦心せり。」（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 83）という状態であった⁵⁸⁾。鳥居は、この古城の調査に4日間費やした。

遼の上京調査を完了し、今度は針路を東に向きを変え、阿魯科爾沁王府に向かった。王は北京滞在中で不在であった。しかし、ここでも非常な歓迎を受けた。当地で1泊して、相僕などを見物した。その後、チャガンホトン（白城）などの古城を見学して、興安嶺山中を通過して西烏珠穆沁王府に到着した。王府は興安嶺山脈の西端に位置するが、人情も質僕であり、大変蒙古の古風を残している。生活は牧畜が主体である。鳥居によれば、内蒙古で固有の蒙古風俗をみようとするれば、この地が最適であると絶賛する土地である⁵⁹⁾。西烏珠穆沁の住民と同様に、王府も内蒙古の中でもっとも富裕である。その理由は領内に塩湖があり、そこから採取される食塩のためであるという。王府で1泊してManhaの中を西北に向かって進んだ。数日後に、蒙古人がイフノール（大湖）またはタブリテノール（塩湖）と称している湖に出た。この湖の北岸に僧侶が200名余りも住むラマ廟がある。住民は食塩を採取するとき、僧侶に祈禱してもらい、採取しているという。当地では、蒙古人の身体測定などを実施し、さらに北西に進み、外蒙古に向かう。

5月23日はじめて外蒙古に入る。喀爾喀王府領である。しかし、内蒙古と外蒙古の各王は連絡せず、それぞれ敵視している様子である。それ故、西烏珠穆沁王府より随行してきた役人は、付近の村の役人を召集して、15・6名からなる隊伍を組み、外蒙古に入る隊列を整えた。外蒙古の最初の村ボロガンボロルチには、タイチ（村長）が不在であった。ここで、随行してきた西烏珠穆沁の役人たちは、内蒙古に引き返すことを薦めた。しかし、逆に鳥居はこれらの役人たちに帰ってもらい、この村に宿泊することにした。役人たちが帰ったのを確認すると、村民は急に親切になり、子供に乳を与えるなどしてもてなしてくれた。ここから数日間進んだ地点で、年代末詳の長城（フルムインチャムまたはホゴチンフルムと呼ばれている）を発見し、また付近では石鏃などの石器も採取した。さらにManhaを北西に進み、5月28日喀爾喀王府に到着した。

王府は内蒙古の王府とはまったく異なり、王の住居以外はすべてテントであった。当地で2泊

し、さらに北上することにした。しかし、以北の地は人家が少ないので、食物その他の物品を入手することが大変困難なことが分かった。王府では、そのためにとくに羊・水桶・杓子など一切の必需品を車に積んで供与してくれた。目ざすはヴェルノール湖である。この湖一帯は、喀爾喀領右旗に所属しているはずである。しかるに、ドイツ・ロシアなどで出版されている地図では、すべて清国黒龍江省の一部と記されている。鳥居は、この相違はどのような理由からか、再考する余地が存在すると考えた。当地では、^{バラカ}巴爾喀と呼ばれている蒙古族の一派が居住していたので、彼らの風俗・習慣などについて調査を行なった⁶⁰。さらに、北方に進みたかったが、湖の北を流れる喀爾喀河を越えると先は黒龍江省である。鳥居夫妻はそこへのビザを入手していなかったため、今回はここまでとし、東に方向を転じ、デッタバイシン王府に向かった。

6月5日にデッタバイシン王府に到着した。ここは外蒙古でもっとも東部に位置している。王はいにく庫倫(ウランバートル)に出かけており不在であったが、1泊した。さらに南下を続け東烏珠穆沁領に入った⁶¹。再び内蒙古に戻ってきたのである。また数日間山中を南下して、6月13日王府に到着した。王府でも種々調査を行なったが、王が力士(ブフーという)を召し抱える習慣が存在していることを発見し、大いに驚いた。というのは、かような習慣がわが国の古代にも実在したからである⁶²。

その後、東札薩特王府を通り、西札薩特領を目ざして、興安嶺山中をさらに南進した。西札薩特では、今回の調査目的の1つであるシャーマン教の調査を行なうことにしていた。実は、鳥居は、東烏珠穆沁王府で巫子に会いたいという希望を出していたのだが、断われたという経緯もあり、今回やっと実現したのであった⁶³。当地で、タモという67歳の老女と、その弟子ウルチという43歳の男性の巫女に会い、種々の調査を行なった後、実演してもらった⁶⁴。その様子は、「先ず四方を拝し、次に諸神の御名称へて之を呼び集めたる後、一種の祝詞を唱えつゝ太鼓をたきて踊り始む。其の踊りは、太鼓を打ち乍ら足を右方、左方或いは円形に滑らすなり。又太鼓の打ち方はドン、ドドン、ドドンにして、最初は緩やかなるも漸次急激となり、幾度も繰り返して踊り狂へり。太鼓の音、柄の端にある錫杖の揺ぐ音、腰鏡の相触るゝ音、互いに相和して一種の調子を生ぜり。彼等の踊りは愈々急激となり、遂には殆んど人事不覚の状態に入り、其の極斃れて止むに至る。」(鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 193)というように、激しく踊るものであった。シャーマンの調査が終了すると、再び阿魯科爾沁王府に向かった。王府では相撲を見物したり、記録の整理などして過ごした。その後、大巴林王府を経由して、噶河を渡河し、往路と同じ行程を進んで東翁牛特王府に着いた。ここから、往路でも調査を実施した烏丹城に出かけ、再度補足調査を行なった。7月24日には出発点の赤峰に無事帰ってきた。

赤峰では42日間滞在し、休養・資料整理などにあてた。8月22日には北京に向けて出発した。北京から今回は西北に針路をとり、万里の長城を越え、張家口を目ざした。そこからドロレノール、チャハル蒙古に進み、さらに経柵、小林巴、阿魯科爾沁などを経由し、老吟河を渡河した。勿論、これらの行程では各所で種々の調査を試みた。その後、奈曼、敖漢の両王府を経由して赤峰に戻った。そこから、朝陽、錦州経由で出発点の北京に帰った。期間は3ヶ月近くに及ぶもの

であった。同行は妻と子供であった。

かようにして、1月から11月にかけて約11ヶ月にも及ぶ第2回蒙古調査が終了した。鳥居は、かかる長期間の調査を

- ①蒙古に石器時代の存在したことが確認できたこと
- ②契丹すなわち遼の遺跡や遺物について、基礎的な研究・調査ができたこと
- ③遼以前の遺物をも多数収集することができたこと（鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 257)

の3点に大きく要約できると述べ、実り豊かな収穫を得たのであった。

4. 満蒙調査の位置づけ

前項において、鳥居龍藏が実施した満州・蒙古の両地域に関して、代表的な field survey と思われる調査旅行をとりあげ、やや詳細にその概要を論じてきた。このような満蒙を中心とした field survey は、鳥居の60年以上にもおよぶ長期間の研究生活⁶⁵⁾の中で、どのように位置づけられるのであろうか。かかる点を以下において検討していくことにする。その理由は、本稿で論を展開してきた満蒙調査が、既に記したように、長年実施してきた海外での最初の field survey である点と、満蒙調査が調査回数および日数においても、他の海外での地域調査よりも群を抜いて多いという点である。かような事実から、満蒙の両地域は、鳥居が海外においてもっとも重視していた地域であると看做すことが可能であると思われる。

では、何故、鳥居は満蒙の両地方に関して、かようなまでの関心を有したのであろうか。主として鳥居の研究生活全体を検討する中で論じていくことにする。鳥居の生涯を通じての研究テーマは、非常に多岐にわたっている⁶⁶⁾。その1つに、日本民族・文化の起源に関するものが存在する。この点に関する鳥居の結論は、日本列島に最初に居住したのはアイヌ民族であるが、その次に日本列島に渡来した集団—鳥居の提唱する固有日本人—が、いわゆる日本民族および文化の形成に多大の影響を与えたとするのである（鳥居龍藏 1925a 鳥居龍藏全集第1巻 1975a, pp. 212~230）。すなわち、先住民であるアイヌ民族とは別の形式の石器を使用する集団が、石器時代の中期ないし後期に渡来し、彼らが弥生式土器を製作するに到ったと主張するのである。

かように主張する鳥居説は、当時非常に反対された⁶⁷⁾。しかしながら、かかる立場は、その後、岡正雄の「日本文化の基礎構造」（大間知他編 1958, pp. 5~21）などに受けつがれ、大いに発展していく。

すなわち、岡は、日本文化を構成したと考えられる種族文化複合として、次の

- (1). 母系的・秘密結社の・芋栽培—狩猟文化
- (2). 母系的・陸稻栽培—狩猟民文化
- (3). 父系的・「ハラ」氏族的・畑作—狩猟民文化
- (4). 男性的・年齢階梯制的・水稲栽培—漁撈民文化
- (5). 父権的・「ウジ」氏族的・支配者文化（大間知他編 1958, p. 7）

の5種型を想定するのである。そのうち(3). 父系的・「ハラ」民族的・畑作—狩猟民文化という特色をもつ種族文化複合が、鳥居の主張する固有日本人に近いと思われる。しかしながら、岡は、このような種族文化複合をもつ集団が日本列島に渡来してきたのが弥生時代初期であると推定しているのに対し、鳥居の場合は、前述の如く石器時代(縄文時代)中期～後期というように、渡来した年代に関しては異なっている。とはいうものの、このように、日本民族・文化の起源を考察する場合、満蒙での field survey を基礎とした鳥居説は、先駆的な研究業績と考えられる⁶⁸⁾。なお、前項でも度々論じてきたように、満蒙の field survey において、絶えず出土する石器時代の遺物に関心をもったのは、あるいは固有日本人が使用した石器と、満蒙で出土する石器との共通点を探していたかも知れない。

以上簡単に論じたように、日本民族および文化の起源に関する問題は、非常に興味がつきない。しかし、鳥居は晩年になるに従って、学問的関心が薄らいでいったように推察できる。すなわち、大著『有史以前の日本』(鳥居龍藏 1925a, 鳥居龍藏全集第1巻 1975a, pp. 1~166)出版後、かかる問題に関しては、学問的な進展があまりみられないからである。この点に関していえば、大正デモクラシーと称され、学問的にも比較的自由的な雰囲気につつまれていた大正時代とは異なり、昭和に入ると、皇国史観が従来以上に台頭するにつれて、日本人の祖先つまり鳥居の想定する固有日本人が渡来してきたと主張するのが憚れることになったためと思われる⁶⁹⁾。

これに対して、初期の満蒙調査当時から関心を有していたのは、かつてこの地方に盛えた契丹すなわち遼代の文化に関する研究である。本格的にこの研究を開始したのは、昭和5年の第5回満州調査からで、昭和9年を除き昭和10年まで毎年現地に出かけることになる。この度重なる field survey の成果を整理して『考古学上より見たる遼の文化』と題する大著を作成していたが、残念なことに未定稿のままに終わった⁷⁰⁾。かかる方面での研究業績に関しては、いずれ稿を改めて論じる予定である。

5. 結論

膨大な鳥居龍藏の海外における field survey のうち、満蒙調査に焦点をあて論を展開してきた。全体を再度要約する余裕をもたないが、長期間にわたる鳥居の海外での field survey でも、この満蒙調査は彼の研究生活を通して、もっとも充実した時期に実施されたものといえよう。それ故、前項でも指摘したように、鳥居の研究業績を検討する意味からも、もっとも貴重な field survey といえる。

以上のように、非常に多大な成果をもたらし、かつ以後の日本民族・文化の起源に関する先駆的な業績を残したとはいえ、本文中で度々論じたように、次の点については問題としなければならないと思われる。すなわち、とくに満蒙において調査を実施した地域の多くは(とくに満州)、日清・日露の両戦争により日本軍が侵略・占領した地域である。時代的背景などを考慮すれば、そうならざるではないかという見解も存在するが、現在においても、世界各地で紛争が継続している地域が存在することを考えれば、一考を要する問題といえよう。

かかる点に関して、確かに鳥居は軍より多大の援助を受けているが、喀喇沁王府において蒙古人を教育する場合、「一体私達が蒙古に来た目的は、軍国主義の使命を果たすためではなくて、蒙古人に親しみ、文化的に彼らを教育すると共に、私の専門とする人類学・考古学をこれから研究せんがためである。」(鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 238) と述べているように、すべてがすべて軍に加担したことはなかったことも認めなければならないだろう。

鳥居の満蒙調査に代表される地味な粘りづよい努力によって、わが国の海外における科学的な field survey の道は拓かれたのである。

註

- 1) この他、鳥居の海外調査歴としては、文部省文化使節ならびに東方文化学院派遣員として、人類学・考古学研究のために、ブラジル・ボリビア・ペルーなどを歴訪している。期間は1937年3月11日より翌年1月26日までである。同行は次男の龍次郎である。
- 2) 周知のように、現在では中華人民共和国の東北地方と称されている地域である。本稿においては、鳥居が活躍した時代に立論の焦点を合わせているため、本文中における地名に関しては、鳥居が使用している地名をそのまま使用し、初出の場合に限って現在の名称を括弧内に表記した。
- 3) 鳥居龍藏の著作・論文は未完成のものを除きすべて、鳥居龍藏 (1975~76) 『鳥居龍藏全集全12巻, 別巻1巻』朝日新聞社に収録されている。本稿でも原則としては全集版を利用した。それ故、著作・論文の引用に関しては、原著・論文の出版年度、全集の巻名およびページ数の順で表示した。
- 4) 東アジアを主とする鳥居の field survey は、その後の海外における調査の指針にもなったといわれているほど、その評価が高い(白鳥・八幡 1978, p. 288)。しかしながら、鳥居の東アジアを主とする海外での field survey は、後述するように日本軍のこれらの地域への侵略と深く係わっていることも事実である。
- 5) この他、同様に鳥居のわが国における field survey を分析・検討した拙論(田畑 1992)も存在する。合わせて参照されたい。
- 6) 鳥居は、ドルメンを小孤山と析木城との間の沙河の丘上で発見した。これは、石塚のみの石室で、いわゆる「土の覆はざる石塚(Uncovered dolmen)」(鳥居 896, 鳥居龍藏全集 1976a, pp. 596~597) タイプのものであった。
- 7) 鳥居は、晩年満蒙調査を回顧したエッセイの冒頭部分において、「私は青年の時代から満州に最も興味を感じた1人であった。満州にかく興味を感じるようになったのは、満州(朝鮮・蒙古・シベリア等)に関するシナの本や欧米人の同地旅行記などを好んで読んだから、自然にそれに伴われて行なったようである」(鳥居 1936, 鳥居龍藏全集 1976g, p. 5) と記している。しかし、具体的に何を読破したかは不明である。
- 8) このような学術用語は存在しない。しかしながら、当時(一部は現在でも)において、かか

る述語が専門用語あるいは一般語として使用されていたようである。

- 9) 坪井正五郎は、当時東京帝國大學理科大学理学部人類学教室主任・教授で、東京人類學會會長を兼職していた。
- 10) 周知のように、その発端は甲午農民戦争（わが国では一般に「東京党の乱」といわれている）である。かかる戦争の開始は、「1894年7月23日綿密に策をめぐらして、日本軍は朝鮮王宮を占領した。7月25日、日本軍艦が豊島沖海上で中国軍艦を迎え討ち、宣戦布告なしで甲午戦争が勃発した。」（易顕石 1989, p. 28）というように、日本軍が奇襲攻撃をかけてはじまった。
- 11) 例えば『ニューヨーク・ワールド』は、「日本の文明の皮膚を被り野蛮の筋骨を有する怪獣なり。日本は今や文明の仮面を脱し、野蛮の本体を暴露した。」（藤村道生 1971, p. 354）と報じたという。なお、これら海外での報道に対して、当時の外相陸奥宗光、福沢諭吉などは日本軍の行為の正当性を主張した（小島・丸山 1986, pp. 43~44）。
- 12) その後、ロシア・フランス・ドイツの3列強国による、いわゆる三国干渉の結果、遼東半島は、清朝が3000両で買い戻すことになった。
- 13) 前項でも指摘したように、鳥居の東アジアにおける field survey に関しては、結果的には日本軍が侵略したり、占領した地域が多い。しかも、調査にあたっては日本軍からの便宜を少なからず受けている。これら一連の鳥居の東アジアにおける field survey は、時代的制約が多分存在することを是認しても、かかる点に関しては、鳥居の field survey を検討するとき決して忘却してはならない分析視点だと思われる。つまり、この点について例えば「昨年4月馬関条約に抛り遼東の半島が我が身となるや、余は己が研究せる区域なりとて、自ら其の地を跋歩せんず念うた禁ずる能はず」（鳥居 896, 鳥居龍藏全集第8巻 1976a, p. 574）という記述からも、鳥居の立場がかなり明白に判明すると思われる。
- 14) 近世末期以前においても、当時のヨーロッパではほとんど知られていなかったサハリンに関しても松前藩が探検を行っていた。例えば、明正2年（1635）松前藩主蠣崎公広は、家臣の佐藤嘉左衛門・蠣崎蔵人の兩名をサハリンに派遣し、探検・調査させた。その後も、松前藩は数回にわたりサハリンに家臣を送り、探検・調整させている。（長沢 1969, p. 204）
- 15) ロシアの南下を知らせたハンベングロウの書簡は、奄美大島駐在の薩摩藩の役人から長崎奉行所に送られ、そこから幕府に転送された（長沢 1969, p. 208）
- 16) 例えば、林子平は天明5年（1785）に『三国通監図説』を著わして、蝦夷・琉球・朝鮮の現状を訴えた。しかし、当初は「人心を攪亂するものとして問題の著」（山口 1943, p. 44）であった。
- 17) かかる点を多少補足すれば、『赤蝦夷風説考』は、ロシアの南下の野心を主体に論述し、そのためにも、早急に蝦夷地を開拓して之に備えるべきことを説いたものといえよう。すなわち、本書は後に「圖らずもこれが蝦夷地問題の理論的嚆矢であり、その後の蝦夷地研究、探検、實測等の先驅をなすに至った」（山口 1943, p. 42）というような評価を得ることになっ

た。

- 18) ロシアは、17世紀末にカムチャッカ半島を征服し、1711年ダンロ・アンジフォロフがシムシム島、1713年にはイワン・コジレフスキーがアライト、パラムシルの両島を探検した（長沢 1969, pp. 205~206）。
- 19) 社長は、北白川能久親王で、渡辺洪基・榎本武揚・花房義質・鍋島直大・長岡護美が創立を首唱した。なお当時、かような団体ではその責任者を社長と呼ぶのが一般的であった。
- 20) 正確に述べると、東京地学協会では、機関誌として明治12年から同30年（1897）まで『東京地学協会報告』（第1巻～第18巻）を刊行した。また、明治26年（1893）1月より『地学雑誌』（第5集49巻から）を同協会の名の下に刊行し、現在に及んでいる。かような複雑な経緯がみられるのは、『地学雑誌』を第1集から第4集まで出した地学会という団体が、東京地学協会に吸収・合併されたからに他ならない（石田 1984, p. 87）。
- 21) 1830年ロンドンで創立された世界で3番目の歴史を有する地理学会。王室の後援などを受け460名のメンバーで発足した。講演の他、1899年以来“Geographical Journal”誌を発行し、イギリスの地理学の発展に大いに貢献すると同時に、南極・北極の両大陸をはじめ世界各地に探検隊の派遣・援助を行ってきた。
- 22) 石田龍次郎は、東京地学協会がイギリスの‘Royal Geographical Society’を模したものであるが、名称を「地理学協会」と名付けず、「地学協会」と命名したのは、第1として、当時「地理」という用語が、中国伝統の国郡誌（方志）を指していたと思われ、現在のような意味では使用されていなかったこと。第2として、西洋伝来の‘Geography’は、幕末では五大州の形状、人種、各国の政体、都府、軍備などの諸国誌を意味し、慶応から明治時代初期では国尽しに代表される世界知識となり、明治5年（1872）5月の学制発布とともに、小・中・高の各々の学校教育にとり入れられ、教育用の素材となって重用されたものを意味するというように、時代とともにその内容が大きく変化していった。東京地学協会首唱者の1人である渡辺洪基などは、このような2点に要約される意味内容で理解されたもの以外を、イギリスなどヨーロッパの‘Geographical Society’の記述の中に発見して、それを日本でも必要に感じたためであると推定している。つまり、そのような意味内容のものを、日本語で表現するには従来の「地理」では誤解が生じると考え、より広い意味を内包している「地学」という用語を採用したのである（石田 1894, pp. 89~91）。
- 23) 蒙古調査は明治39年（1906）に第1回調査が実施され、最後の第4回調査は昭和8年（1933）に行なわれた。
- 24) 鳥居龍藏自身も単行本（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, pp. 288~394, 鳥居龍藏 1932, 鳥居龍藏全集第9巻 1976, pp. 395~542など）においては、満蒙という言葉を用い、満州・蒙古の両者を区別していない。それ故、本稿でいう第4回満州調査は、鳥居によれば第8回満蒙調査となる。このように、本稿では、鳥居の満蒙調査を満州と蒙古とに区分したのは、調査対象が満州族・蒙古族というように異なる民族集団であるので、風俗・習

慣・言語などに代表される伝統文化が相違している点を明確にするためである。なお、かような区分は『著述総目録・年譜』（鳥居龍藏全集別巻 1977, pp. 180～222）においても踏襲されている。

- 25) 鳥居が調査に出かけたのは、本文でも言及したように、日清両国が講和した直後の日本側としては比較的安定した時期であった。しかしながら、安定していたとはいえ、当初の満州において日本人が旅行できる地域は遼東半島およびその北部の海城から営口付近に限定され、遼陽・奉天（瀋陽）などには出かけることができなかった（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 289）。
- 26) なお、同時期に、京都帝國大學の内藤湖南（虎次郎）博士にも、外務省より満州への調査が命じられた。
- 27) この鉄道は、日露戦争後のポーツマス条約により、日本が引き継ぐことになった。そこで日本は、半官半民の組織である南満州鉄道株式会社を明治39年（1906）に設立した。それ故、鳥居の第2回満州調査の時点においては、乗車したこの鉄道はロシアの所有であった。
- 28) 第1回目の調査のとき、残念ながら修理中であった関帝廟前の文・武人の土偶は修理が終了されており、大変なつかしく感じられた（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 291）。
- 29) 多くの古銅器類、乾隆帝が作成させた、全国の少数民族の男女を各々1名ずつ描きわけた『皇清職貢図』の原図、四庫全書なども見学したが、鳥居にとっては、乾隆帝清寧宮内のシャーマン教具（太鼓・腰鈴などから神杆まで）の写真撮影ができたことが最大の有益であったという（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 291）。
- 30) この地は、高句麗の古都であり、高句麗を調査するにはもっとも大切な場所といえる。鳥居は、今回の調査は斯学上特筆すべきものにして、先駆者であると自画自賛している（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 291）。
- 31) この点に関しては、某博士（関野貞博士など一筆者註）が平壤に存在する古墳をもって、高句麗のものであると発表したことがあった。これに対して、鳥居はこの古墳は漢民族の墳墓で、しかも樂浪郡・帶方郡のものに違いないと断定した。ところが、いつの間にか、この古墳は、鳥居が主張するように、某博士などの著作の中でも漢墓となってしまっていた。かように、鳥居がこの古墳を漢墓と断定したのは、通溝に存在する高句麗墳墓群や遼陽の漢墓を調査し、それらを比較検討した結果から導き出した結論である。これに対して、従来よりわが国の研究者がこのような結論に到達できなかったのは、歴史的には朝鮮半島に漢民族が進出したことがないという誤った史実に従っていたからに他ならないと指摘する。かように、鳥居は、比較研究の重要性を強調する。しかも、学閥・党派との関係からか、この説を従来から黙殺し、平壤及びその付近の古墳の発掘調査に従事させないのは大変遺憾であると大いに憤慨している（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 292）。

なお、鳥居の研究態度にみられる比較を重視する立場は、現在の考古学をはじめ民俗学・

人文地理学などの関連諸科学の研究者が field survey を実施する場合、常に銘記しなければならない観点だと思われる。

以上論じた鳥居の見解は、論文として学会専門雑誌に発表済みである（鳥居龍藏 1910a, 鳥居龍藏全集第8巻 1976b, pp. 603~617, 鳥居龍藏 1911a, 鳥居龍藏全集第6巻 1976f, pp. 576~587など）。

- 32) 鳥居によれば、第4回満蒙調査となる。
- 33) 鳥居は、明治38年(1905)に東京帝國大學講師を嘱託されており、その直属の上司が坪井だったので相談したのであった。
- 34) と同時に、関東都府の嘱託ともなった。なお、後から同人類学教室の同僚である大野延太郎も現地に出かけ、しばらくの間共同で調査を実施した。
- 35) 調査には、後からやって来た大島の援助を得た。なお、かかる調査は短報としてまとめられている（鳥居龍藏 1909, 鳥居龍藏全集第8巻 1976a, pp. 617~618）。
- 36) 鳥居によれば、第3回満蒙調査となる。
- 37) 鳥居によれば、第8回満蒙調査となる。調査記録の中では、今回の調査を第7回調査と誤って記している（鳥居龍藏 1928a, 鳥居龍藏全集第9巻 1976b, p. 296）。このように、例えば、明治42年(1909)に実施された既述の第3回満州調査（鳥居のいう第4回満蒙調査）を明治43年というように、鳥居の記録・報告書には年号に関する明らかな誤謬が各所にみられる。なお、本稿の分類（第1表など）でいえば、本調査は一部では蒙古の調査にも従事しているが、満州が主体であるので、満州調査（第4図）とした。
- 38) 鳥居によれば、第10回満蒙調査となる。
- 39) なお、同行者でもある妻きみ子にも、第1回・第2回蒙古調査に関する詳細な調査旅行に関する記録が存在する（鳥居きみ子 1927）、しかし、本稿では、鳥居龍藏の眼からみた蒙古調査の分析を主体にしているため、かかる記録を参照しなかった。
- 40) 河原操子である。河原に関しては、教育顧問として蒙古に渡った彼女には、軍事スパイとしての内蒙古の種々の情報を収集するという極密任務が与えられていたとされる（福島真子 1935, 山崎明子 1995, pp. 81~86など）。
- 41) 市村が鳥居夫婦に蒙古行き白羽の矢を立てたのは、鳥居が学術的な立場から、かかる方面での調査を実施したいという希望を非常に強く有していたことが最大の理由である。しかしながら、当時鳥居は、理科大學講師であるにもかかわらず、文科大學で白鳥庫吉博士に匈奴、東胡民族史を、また、市村瓊次郎からも漢代史を聴講していた。とりわけ、「当時文科大學、殊に白鳥博士の仕事（博士などが中心となって東洋学会を設立し、機関誌『東洋學報』を発行すること一筆者註）に対してあまり尽力をし過ぎたため、動物学科主任箕作博士や坪井先生から好感をもたれなくなり、私と先生との間に溝が出来てしまった。」（鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 236）という状態となってしまった。そこで、鳥居は、坪井先生に対して、講師を辞意するつもりで辞表を提出した。ところが、坪井先生はこの件を許

可されず、当時鳥居がもっとも師事していた松村任三博士を通じて、辞表を取り下げるように試みられた。しかし、松井博士に頼まれても辞意を撤回しないでいたところ、濱尾大学総長の耳にこの件が入り、総長より大いに宥められ、ついに辞表をひっこめてしまった。つまり、市村は、自分の講義に聴講に来ていることもあり、鳥居が上司の坪井との関係がうまくいっていないことを知っていた。それ故、鳥居夫婦に蒙古行きを薦めたものといえよう。結局、上述のような紆余曲折を経て、鳥居は東京帝國大學理科大学講師の身分のまま、蒙古に出かけることになった。

- 42) 当時、鳥居夫妻には生後間もない長男が誕生していたが、妻の実家に、その後妻の姉の婚家に預けられた。
- 43) 調査旅行においては、夫妻は1人の通訳も伴わず、鳥居がかつて学習した蒙古語などに頼った(鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 4)。また、後述するように、王府での言葉の修得がとくに役立った。
- 44) かかる点は、現在において、文化人類学などを筆頭とする海外での field survey に従事する研究者間では、半ば常識となっている事実である。しかしながら、当時において、調査対象地域の現地語を修得して調査を行なうということは画期的な出来事だったと思われる。かような意味からも、鳥居の海外での field survey から学習しなければならぬ点が多い。
- 45) 実は、夫妻の間には明治37年(1904)に第1子(長女)が誕生していた。しかしながら、この長女は養女に出されたので、戸籍上は今回誕生した子が長女となっている(中藪英助 1955, p. 186)。
- 46) 妻とともに、鳥居の方も王府では教育顧問として男子学堂にて教育にあたった。
- 47) 鳥居は、第1回蒙古調査のときにも、北京において服部博士夫妻宅に逗留するなど、種々の便宜をはかってもらった。今回も同様に宿泊させてもらった。服部博士は漢学者であるが、数年来より清国大学堂総長の任にあり、また夫人も清国で新たに女学堂を開設するなどして、清国の教育の発展に貢献していた。
- 48) 具体的には、「君の今回の蒙古行き幼女を抱き夫人と同伴せられるのは、足手まどいであり、婦女のこれに加わるは、いわゆる、雌鶏鳴きて暁を報ずで、余の好まざるところである。」(鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 229)と非難された。
- 49) 今回喀喇沁王府では、王の客分として滞在した。なお、当時喀喇沁は、右旗・左旗・中旗の3種類に分かれており、鳥居夫妻が招かれたのは右旗(西喀喇沁王府)であった。
- 50) とはいっても、蒙古語中に漢語が混在していることが非常に多く、子供が話す名詞などは蒙古語か漢語かの区別がつかないという状態であった。
- 51) 元々、赤峰とい名称は、蒙古語の Olanhata(赤色の岩山)の漢訳である。したがって、以前は蒙古人の土地であったと考えられる。
- 52) ポンスク老人が同行を拒絶したのは、①北方は大変寒い地域であるということ、②北方蒙古人は、南方蒙古人よりも頗る寧悪であること、③調査旅行中、盗賊に会う恐れがあること、

④自分の身体が不調であることの4点であった(鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 29)。一方、鳥居の方でも、次のような理由から通訳に関しては余り期待していなかった。すなわち、当時、蒙古語の通訳としては、ア) 年少の頃より蒙古地方に行商に出かけていた漢民族、イ) 南方の蒙古人で、漢語を話せる者に限定された。しかし、前者は、品性に欠けた者が多く、後者は性質が漢民族化してしまっており、ともに通訳としては不敵格者と看做された。さらに、蒙古人を雇うことが困難なため、漢民族の通訳を北京あるいは満州において雇うことになることが多い。しかし、これから出かける場所は、北方の蒙古語のみが通用する地域なので、それではただ目でみる以外、聞くことも知ることも出来ないという結果となることが予想される(鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, pp. 28~30)。

- 53) 例えば、五色の糸、砂糖、煙草、布類、鏡、玉飾、石版画、各種の薬品などほとんど世話になった蒙古人への贈り物であった。
- 54) なお、その他に赤峰県の役人の好意により、騎兵4名が護衛として同行した。このように、今回も鳥居の調査旅行には、通過する王府などごとに護衛をつけてくれることが多かった。
- 55) 最初は王が留守であり、また人数も多いという理由で宿泊を拒絶された。しかし、交渉の結果、これまで護衛してくれた騎兵には帰ってもらうとの条件で、やっと宿泊が可能となった。
- 56) 当初考えていた以上の長期間滞在することになったのは、赤峰に1包みの荷物を忘れてきたためで、その荷物の到来を待っていたのであった。
- 57) 一般に蒙古語では烏丹城をボロホトンと呼んだように、古城はすべてボロホトン(青城)と称される。
- 58) この古城は、「其の証拠とする所は文献上の事実、現今存在する城壁、内部の建物の跡、塔、古仏、石人、瓦、陶器、古銭等其の他尚ほ余等の前回に記したる慶州古城との関係等なり」(鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 84)という点で、遼の上京と推定したのであった。
- 59) 鳥居によれば、蒙古人は貧富の差をテントの色で区別しているという。すなわち、白いテントは富裕者で、チャガン・ゲル(白家)と、黒いテントは貧者で、ハラ・ゲル(黒家)と各々呼ばれている。西烏珠穆沁は一般に富んでいるのでチャガン・ゲルが多い(鳥居龍藏 1953, 鳥居龍藏全集第12巻 1976g, p. 246)。
- 60) その他、当地では、ソロン人の集落を訪問することにし、宿泊していた家の住民を案内人として出発する約束をしていた。しかし、住民は出かけることができないといい出した。これは、役人から他国人を案内して、ソロン人の集落に行なってはいけないと警告されたためであった。
- 61) 鳥居は東西の烏珠穆沁を旅行したことになったが、「実際西烏珠穆沁は古来純朴にして、武器も兵士も無きに、東烏珠穆沁は全く之に反し、総ての組織を兵に採り、村には兵の如きものを置く等、事情大いに異なるものあり。」(鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 163)というように、両領の様子はかなり異なっていた。

- 62) わが国の場合、地方より力自慢の者を召して、扶持を与え、儀式のときに相撲を取らせるといふものである。蒙古の場合、オポのとき相撲を取るという。
- 63) 蒙古では内・外を問わずラマ教が支配している。そのためラマ教とは関係のないシャーマンと呼ぶのは困難を伴うのであった。このようなことから、当地のシャーマンに関する記録としては、マルコ=ポーロの旅行記ぐらいしか存在しない（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 190）。
- 64) 一般に、「病家に招かれたる時には、先づ氈帳内に Ongoto と称する神を祭り、神前に一頭の殺したる羊及び乳にて作れる神酒とを供へ、巫人も共に飲食し、次に病人を其の前に座せしめ、病人を中に挟みて彼等は祈禱を始むるなり。」（鳥居龍藏 1911b, 鳥居龍藏全集第9巻 1975b, p. 193）という順序で行なわれた。
- 65) 鳥居の最初の論文は、17歳のときに発表した。その内容は、地元の古城に関して論じたものである（鳥居龍藏 1887, 鳥居龍藏全集第4巻 1975f, pp. 519~521）。
- 66) 多岐にわたる鳥居の研究テーマを包括的にあつかった研究としては、主として古墳時代の日本文化に関する著作（鳥居龍藏 1925b, 鳥居龍藏全集第1巻 1975a, pp. 1~166）、石器時代の日本に関する著述（鳥居龍藏 1925a, 鳥居龍藏全集第1巻 1975a, pp. 167~453）が代表的である。
- 67) 鳥居によれば、反対を唱える人々は、「吾人祖先は有史以前には未だ日本へ渡来せず、石器を使う時代に日本人がこの土地へ移って来たなどということは謬りである」（鳥居龍藏 1925a, 鳥居龍藏全集第1巻 1975a, p. 212）と主張して批判したという。
- 68) しかしながら、鳥居の主張する固有日本人が満蒙から石器時代中期から末期にかけて渡来したのであれば、稲作の問題など解明しなければならない問題が残されている。すなわち、一般には稲（水稲）は縄文時代晩期に長江下流付近から渡来したとされているからである。
- 69) 岡の場合も同様で、「日本の基礎構造」にみられる立場を日本で発表したのは、第2次世界大戦終了後の昭和23年に開催された座談会の席上であったという事実からもうかがわれる。なお、この座談会の内容は、その後単行本として出版された（石田他 1958）。
- 70) 岡崎敬の解題によると、未定稿の原稿400字詰め約1600枚を次男龍次郎が保管しているとのことである。なお、この大著に付随する予定の写真集『考古学上より見たる遼之文化』は全5冊のうち4冊までが刊行されている（鳥居龍藏全集第6巻, 1976f, pp. 662~663）。

引用文献

- 藤村道生 1973 『日清戦争—東アジア近代史の転換点—』 岩波書店
 福島貞子 1935 『日露戦争秘史中の河原操子』 婦女新聞社
 石田英一郎他編 1958 『日本民族の起源』 平凡社
 石田龍次郎 1984 『日本における近代地理学の成立』 大明堂
 川喜田二郎 1967 「野外科学の提唱」 自由9-5 pp. 10~21

- 小島晋治・丸山松幸 1986 『中国近現代史』 岩波書店 (岩波新書)
- 国立民族学博物館編 1993 『民族学の先覚者, 鳥居龍藏の見たアジア』 財団法人千里文化財団
- 長沢和俊 1969 『世界探検史』 白水社
- 中蘭英助 1995 『鳥居龍藏伝』 岩波書店
- 岡 正雄 1958 「日本文化の基礎構造」大間知他編, 『日本民俗学大系 2, 日本民俗学の歴史と課題』 平凡社 pp. 5~21所収
- 白鳥芳郎・八幡一郎 1978 『日本民俗文化大系 (9) 白鳥庫吉・鳥居龍藏』 講談社
- 田畑久夫 1991 「鳥居龍藏と西南中国の少数民族—ミャオ族を中心に—」 日本文化史研究 14 pp. 18~48
- 1992 「鳥居龍藏と大和一畿内調査を中心に—」 日本文化史研究 16 pp. 40~58
- 1994 「鳥居龍藏の field survey—西南中国ロロ族調査を中心に—」 兵庫地理 39 pp. 19~38
- 1995 「鳥居龍藏と北東アジア (上)—シベリア・樺太 (サハリン) 調査を中心に—」 日本文化史研究投稿中
- 東京大学総合研究資料館特別展示実行委員会編
- 1991 『乾板に刻された世界—鳥居龍藏の見たアジア—』 東京大学総合研究資料館
- 鳥居きみ子 1927 『土俗学より観たる蒙古』 大鐙閣蔵版
- 鳥居龍藏 1887 「阿波国ニ古墳ノ記」 東京人類學會報告 17 鳥居龍藏 (1976f) 『鳥居龍藏全集第4巻』 朝日新聞社 pp. 519~521
- 1896 「遼東半島」 太陽 2-6, 7, 9, 11, 12, 14, 15 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集第8巻』 朝日新聞社 pp. 537~597
- 1905 「満州調査復命書」 史学雑誌 17-2, 3, 4, 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集第8巻』 朝日新聞社 pp. 534~542。なお, この復命書は「官報」に記載されたものを専門雑誌に転載されたものである。
- 1907 『苗族調査報告』 東京帝國大學理科大学人類學教室 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集第8巻』 朝日新聞社 pp. 1~280
- 1909 「老鐵山麓の貝殻墓と其遺物」 東京人類學雑誌 285 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集第8巻』 朝日新聞社 pp. 617~618
- 1910a 「洞溝に於ける高句麗の遺跡と遼東に於ける漢族の遺跡」 史学雑誌 21-5 鳥居龍藏 (1976a) 『鳥居龍藏全集第8巻』 朝日新聞社 pp. 603~617
- 1910b 『南満州調査報告』 東京帝國大學 鳥居龍藏 (1976c) 『鳥居龍藏全集第10巻』 朝日新聞社 pp. 1~166
- 1911a 「遼の上京と其遺品上・下」 国華 21-248, 253 鳥居龍藏 (1976f) 『鳥居龍藏全集第6巻』 朝日新聞社 pp. 576~587
- 1911b 『蒙古旅行』 博文館 鳥居龍藏 (1975b) 『鳥居龍藏全集第9巻』 朝日新

- 聞社 pp. 1～284
- 1914a <Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Populations Primitives de la Mongolie Orientale> 東京帝國大學理科大学紀要 36-4, 鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集第5巻』 朝日新聞社 pp. 121～198
- 1914b <Etudes Anthropologiques. Les Mandchoux> 東京帝國大學理科大学紀要 36-6, 鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集第5巻』 朝日新聞社 pp. 199～230
- 1915 <Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Population Prehistoriques de la Manchourie Meridionale> 東京帝國大學理科大学紀要 36-8, 鳥居龍藏 (1976b) 『鳥居龍藏全集第5巻』 朝日新聞社 pp. 231～310
- 1925a 『有史以前の日本』 磯部甲陽堂 鳥居龍藏 (1975a) 『鳥居龍藏全集第1巻』 朝日新聞社 pp. 167～453
- 1925b 『人類學上より見たる我が上代の文化』 叢文閣 鳥居龍藏 (1975a) 『鳥居龍藏全集第1巻』 朝日新聞社 pp. 1～166
- 1928a 『滿蒙の探查』 萬里閣書房 鳥居龍藏 (1975b) 『鳥居龍藏全集第9巻』 朝日新聞社 pp. 285～394
- 1928b 「滿蒙に於ける人類學上の研究に就きて」 啓明舎講演集第5回 鳥居龍藏 (1976f) 『鳥居龍藏全集第6巻』 朝日新聞社 pp. 559～576
- 1929 『西北利亜から滿蒙へ』 大阪屋號書店 鳥居龍藏 (1976c) 『鳥居龍藏全集第10巻』 朝日新聞社 pp. 167～218
- 1932 『滿蒙を再び探る』 六文館 鳥居龍藏 (1975b) 『鳥居龍藏全集第9巻』 朝日新聞社 pp. 395～542
- 1936 『滿蒙其他の思い出』 岡倉書房 鳥居龍藏 (1976g) 『鳥居龍藏全集第12巻』 朝日新聞社 pp. 1～136
- 1937 『遼の文化を探る』 章華社 鳥居龍藏 (1976f) 『鳥居龍藏全集第6巻』 朝日新聞社 pp. 369～556
- 1953 『ある老学徒の手記 考古學とともに六十年』 朝日新聞社 鳥居龍藏 (1976g) 『鳥居龍藏全集第12巻』 朝日新聞社 pp. 137～346
- 1977 『著述総目録・年譜』 鳥居龍藏 (1977) 『鳥居龍藏全集別巻』 朝日新聞社
- 山口貞夫 1943 『日本を中心とせる斬近地理學發達史』 濟美堂
- 易顯石 1989 『日本の大陸政策と中国東北 東アジアのなかの日本歴史 11』 六興出版
- 山崎明子 1995 『アジア女性交流史 明治・大正期篇』 筑摩書房